

Title	断片的な気づきと問い
Author(s)	栗田, 隆子
Citation	臨床哲学のメチエ. 1999, 3, p. 6-7
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/7744
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

断片的な気づきと問い

栗田隆子

10/10(土)、10/31(土)(10/10は個人的に、10/31は大学の有志のメンバー7人との見学)の二回ガラシアを見学させていただいた。感じたこと、考えてゆきたいことを、思ったままに挙げてゆきたい。それは、あくまで「思ったこと」で、何かしらの根拠を求められると困ってしまうのだが、あくまで印象として受け取ったことを、書いてゆきたい。そこで、なにか読んで下さった人が感じた様々なことをフィードバックしてもらおうことを必要としている報告であると思う。

「ボランティア」とは？

私たちはこのガラシアに「ボランティア」の立場としてあの場所にいた。反省会のあるときに、この「老人保健施設」では、この施設内の建物の中だけで、そこにいるスタッフだけで完結するのではなく、地域に根ざした、開いたあり方を目指していくということが話されたが、それならば改めて、そのような外部から来た者、--通常「ボランティア」と呼ばれる--はどのように位置づけられるのだろう、とふと疑問に思った。

実際に確かに人手不足で、配膳などの場

面で「手伝う」ことは出来たと思う。看護婦(士)の人と、介護福祉士、そしてボランティアの役割は重複し、ある場面では分離する。それがいついかなる場で重複し、または分離するのか、ということに答えることは不可能なのかもしれない。むしろ、私が考えているのは、看護婦(士)という立場に立った人だけに全人格的な関わりが求められていく方向で、ケアが考えられるのは問題だという事である。

極論を言えば看護婦(士)というプロフェッショナルに「ケア」を求めるその「ケア」とはどのような性質のものなのかを明確にしたほうが良いのではないかとも思う。

そこから逆にボランティアという素人の、いわば「普通の人」に求められるケアが浮かび上がってこないだろうか。それは単純なプロと素人とといった二極の線引きをしようとしているのではない。看護婦(士)とボランティアという素人の「上下関係」としての線をひくのではなく(経験や技術の差の上下は当然あるが)、具体的な出来ることと出来ないことを、その場に即して考えてゆく際のおのおのの立場の違いで生まれてくる「線」を考察したい。

「痴ほう」とは？

実際に「痴ほう」と呼ばれる方々と話をして感じたことは、「痴ほう」といっても人の性格がそれぞれ十人十色に違うように、個性がそれぞれあること。つまり「一くくりには括れない」こと、である。けれども「痴ほう」である、ということを知り、認識して接しなければ、その人を理解することも出来ない。そのバランスの難しさである。いきなり「きつい」ことを言われて落ち込んだこともある。また話が何度もリフレインして、疲れを感じたこともある。

そして「家に帰りたがって」いる人が多いのは確かだ。「こんなところに連れてこられて、嫌だったら、ちゃんと言ってね」と言われたり、「こんなところに連れてこられて・・・警察も来ないのよ」と訴えてこられた人もいた。

また、「私馬鹿だから、どうしたらいいのか分からないのよ・・・馬鹿だからここがどこだか分からないし・・・」といわれ、それに私はただオウムのように「馬鹿なんですか？」と答えることしかできなかった。痴ほうと呼ばれている人が、またさらに自分のことを「馬鹿」と言っているということが（少なくともそういう人もいる）とても私の心に引っかかっている。

その後西川さんが、あの人はこちらに来たばかりで混乱しているのだろう、と教えてくれた。接するに際し、その人の背景を知ってほしい、とそのとき強く思った。

施設の利用者の人の姿を受け止めるために「痴ほう」だから、という言葉で理解で

きることに、そうでないところを考えていきたい。たとえば笑いを醸すような利用者の発言に対して、ここは笑っていいところなのか、そうではないのかを後になるまで考えてしまった。五分後のことは忘れてしまうかもしれない人ではあっても、その五分を大事に出来るような、接し方。それはもちろん看護婦(士)の立場のひとつと考えなければならないこととしても、むしろ、「ボランティア」(ここではプロではない「普通の人」という意味で)の立場が考えていける事ではないか。

「聴くこと」とは？

わたしは五階の「痴ほう」の方が多く住んでいるところに長くいた。そこで「聴くこと」とは何か、ということを中心にラディカルな人たちで突きつけられたような気がした。いわゆる「通常」の言葉によるコミュニケーションは難しいのは事実だと思う。言葉を「聴くこと」ではない「聴くこと」とは何かを考えたい。それは先ほども書いた「その人の背景を知りたい」という気持ちの延長上にあると思う。

正直言って一回、二回通っただけではその施設のあり方も、もちろん一人一人のありかたが分かるわけでもない。

継続して通うことの大事さを感じると同時、その人とのそのときの一回の出会いの大事さを記述できるような言葉を見いだしていきたい。

(くりたりゅうこ 博士前期課程)